

若手育成助成金（須藤加代子基金）
須藤加代子先生と日本臨床化学会

浜松医科大学 前川真人

須藤加代子先生は令和3年6月30日にご逝去されました。あまりにも早いご逝去で、残念です。心からご冥福をお祈りいたします。

須藤先生は明治薬科大学薬学部を卒業され、慶應大学病院中央検査部に入職されました。その後、菅野剛史先生が1978年に浜松医科大学医学部附属病院教授、検査部長に就任されたことから、1980年に浜松医大病院検査部の助手として赴任されました。その間、慶應大学から医学博士を授与されています。1986年から東京慈恵会医科大学臨床検査医学講座の助手として着任後、87年には講師に昇格され、88年から89年に米国国立環境衛生研究所・客員研究員、91年から東京慈恵会医科大学第三病院で活躍されました。その中で慈恵医大では、ライフワークのLDやChEの遺伝子多型などを中心に精力的に研究されました。2000年から国際学院埼玉短期大学・助教授、還暦で大学を退職し、自身の研究室を準備されましたが、残務と健康などの理由で研究から卒業とのことでした。

最初の論文は1974年慶大病院にいらした頃の「プラスミン様物質によるヒトアミラーゼアイソザイムの修飾について」で「臨床化学」に掲載されました。中検における患者検体の検査データの異常に気づき、そのメカニズムの解明が当初の研究テーマとなったと思われます。一方、医学部医化学講座でのラット肝臓のトリプトファン代謝酵素に関する研究業績もあります。浜松医大に着任されてからは、酵素結合性免疫グロブリンや世界第一例の乳酸デヒドロゲナーゼMサブユニット欠損症に関する研究が主なものとなり、1982年に私が入局してからは、その研究に加えていただき、学ばせてもらいました。東京に戻られてからも共同研究はずっと続きました。常々、臨床化学会は基礎医学と臨床医学が融合した（まさに臨床化学会設立の理念です）、学問的で、非常に面白くするためになるとおっしゃっていました。

さて、須藤先生はご夫婦で晩年に八王子で生活されました。2013年に古希を迎えられた区切りの記念として自分史「逍遙折々 八王子横川に棲んで」を作成されています。写真が主な構成となっていますが、若干の文章が掲載されており、今回の須藤先生から日本臨床化学会への寄贈になった背景が垣間見えるかと思しますので、抜粋して紹介します。

- ・いつの間にか頭が固くなり、とてもオリジナリティのある研究はできそうもありません。貴重な研究費はもっと若く優秀な人が使うべきだと思いました。そんな時に、此処の素晴らしい自然に感謝する日が続き不器用な私の仕事だらけの今までの生活は、人間としてもったいないような気がしてきました。触れたことのない自然や動物、文化、芸術、いにしえの生活や造跡、等々もっともっと色々知りたいことを観ず、感じず、理解せずにこの世におさらばしたくなりました。今まだ少し身体が動く間に自分の自由にできる時間を持てる幸せをかみしめているところです。
- ・これも若き日に自分なりに精一杯、思い切り仕事をさせていただき、充実感、満足感を感じられたためだと思います。色々ご指導ご鞭撻、ご協力いただいた皆様のおかげと心から感謝申し上げます。

また、2011年に作成された日本臨床化学会50周年記念誌に須藤先生が寄稿された文章から受け取れることは、

- ・ 会に参加するのが楽しみ（いろんなことを聴ける、話せる、人とのつながり）
 - ・ 臨床化学会に育ててもらい、自分なりに精一杯、仕事できた
 - ・ 感謝の気持ちでいっぱい
 - ・ 北村元仕先生「何気なしに見落としそうな中に無限の情報がある。臨床化学は宝の山だ」に感銘
- そして、最後のパラグラフには

「今後、日本臨床化学会は、率直に意見を交換する気風を重んじ、若い研究者の育成に勤め発展して欲しい。その研究成果を医療に反映させ、老若男女が未来に夢を持てるよう役立つ会である事を期待している。」で締められています。

寄贈された基金は、このお言葉に合致した用途に使用されるべく、「若手育成助成金（須藤加代子基金）」として運用が開始されました。須藤先生のお意思を受け、若手が育ち、日本臨床化学会がますます発展していくことを願っております。須藤先生はきっと暖かく見守ってくださることと思います。みんなで力を合わせ、前進していきましょう。